

現代詩私論

北岡冬木

昔の詩はわかり易いが、現代史は分かり難い。と言う認識は誰にもある。それはそうだと思う。

何故かと言えば簡単である。例えば昔の印象派の絵画はわかり易いが、20世紀以降のピカソやミロに代表される抽象絵画が理解為難い人が多いのと同じである。

要するに、詩とは言葉による絵画である。言葉が脳で色になったり形になって、恰も絵画のように脳の中で展開されるのである。

例えば私の詩にこんなものがある。

血だらけの花園

すべての花は凶器を自らに突きつけている
季節は七月屋上遊園の回転木馬から
痺れやかな音楽が流れてくる日
マネキン人形は悉く自爆して
ぬめぬめした内臓を露出して羅列する
花畑は血にまみれた謝肉祭
のたうつ心臓総ゆる街辻に配置され
回収し難い真昼の見物渋滞
片づけ忘れた未消化の性欲が
再びこの軀に真紅の花粉を噴霧するか
その限り凶器はすべての花卉に突き刺さっている
やがて花園は血に喘ぎ呻吟するだろう
またしても終了しない祭儀が始まったのだから

これは、抽象画よりも具象画だろうが、題名からしてこの詩からは、一貫して赤色が想起されよう。かなり残酷な光景が頭に浮かび、消して快い情景は浮かばないだろう。実は花園というのは私の幼少期に育った地名なのである。そこに対する懐古と悔恨あるいは復讐心が縋り交ぜになった複雑な心理を描いたつもりである。私はこの故郷を捨てざるを得なかった深い事情があったのである。絵画にしたら恐らくピカソのゲルニカのような陰惨なものとなったであろう。

この表現の心底には私が思春期に体験した世界的な学園紛争があったかもしれない。私は決して積極的な活動家ではなかったが、赤軍派の萌芽もセクト間闘争も見ている。爆弾闘争家の凶器を預かったこともある。それらの体験が私の表現を過激にしたように思える。

岡本太郎ではないが、正に「芸術と爆発だ！」である。

私が影響された詩人は二人いる。

一人は、西脇順三郎である。彼は慶応大学の文学部長を務めたノーベル文学賞にノミネートされたこともある詩人である。西洋を流浪してしたためた詩の数々は、技巧に走らず壮大である。もう一人は安西冬衛である。「てふてふが韃靼海峡を渡っていった」、この「春」という題名の詩はあまりに有名であろう。この二人の詩こそ、現代史の魁（さきがけ）であったと思う。詩を読めば頭の中で絵画が描かれる、という極めて芸術的な作品の数々を生み出したのである。また、私の詩に影響を与えた身近なもう二人についても言及しなくてはならない。ただ、二人とも残念ながら既に鬼籍に入られている。

一人は、「後藤正紀氏」である。彼は日本医大の4年先輩であり、優れた詩人である。丁度学園紛争盛んな1969年、私も日本医大に入学したが、そこに文芸部があつて後藤氏が部長だったと思う。顧問が英語教師の「柄谷行人氏」であり彼はその後法政大学教授などを務め、併せて高名な文芸評論家になった。その柄谷氏が目置いていたのが後藤氏であり、彼の詩はその後棋界でも一定の評価を得ていた。その後藤氏が私に「医師より詩人として全うすれば日本の詩界も変わっていたかも知れない。」というような畏れ多い言葉を生前もらった。もう一人は、私の評論を書いてもらい、連詩ごっこまで付き合ってもらった、寒河江光こと西沢光義氏である。彼もまた生前「森鷗外論」で世に出ている。彼もまた日本医大の1年先輩で国際免疫学者でもある。

この2人の刺激が私の詩作を支えてくれたことは確かであった。